

【井筒】 みづつ

『伊勢物語』二十三、通称「筒井筒」は古典文学屈指の純愛物語です。  
昔、幼い男女が井戸の周りで無邪気に遊んでいました。年とともに二人は恥らい遊ばなくなりました。男はあの娘こそと密かに心に決めていました。娘もあの人こそと思い、成人しても親の勧める縁談に耳を貸そうとはしませんでした。

ついに、男は

・筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに  
(井筒の高さで測った私の背丈はあなたを見ない間に井筒をはるかに超してしまい大人になりました)

と詠み、彼女に贈りました。

女は

・くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ君ならずしてたれかあぐべき  
(私の髪も伸びて肩を過ぎ、上げ髪となりました。あなた以外の人のためではありません)  
と返して、二人はめでたく結ばれました。

女性が上げ髪にすることは少女から成人女性になる意味があったことをご存知のとおりです。  
この物語は世阿弥の謡曲『井筒』にも取り上げられ、樋口一葉の小説『たけくらべ』にも影響を与えています。

茶の世界で「井筒」といえば重要文化財井戸茶碗銘「筒井筒」が思い出されますね。「喜左衛門井戸」・「細川井戸」・「加賀井戸」・「越後井戸」・「有楽井戸」と並んで図版集でおなじみの名碗です。

「筒井筒」は筒井順慶の所持者銘という説もありますが、銘の由来に関し有名な逸話が伝えられています。

秀吉は細川幽斎を招き茶会を催しましたが自慢の井戸茶碗を小姓が粗相して割ってしまいました。このままでは小姓の手討ちは必至です。機知に富む細川幽斎はとっさに五つに割れた茶碗を見て、

・つつみづつ五つにわれし井戸茶碗とがをばおれが負ひにけらしな  
と狂歌に詠んで秀吉の機嫌を治し事なきを得たという話です。『長闇堂記』

割れた茶碗は当然価値が下がるものです。ところが侘び茶の世界では金繕いもまた鑑賞の対象であることは皆様ご承知のとおりです。殊に侘びの季節といわれる秋に好まれるようです。

銘は割れ・接ぎというネガティブな状態を一挙におかしみの世界に導いてくれます。

「筒井筒」の他、割れた様を銘にした例を私の知る限りご紹介しましょう。

「馬蝗絆」(接いだ銚をいなご=馬蝗に見立てて)

「家継」(つぐ)

「瀧川」(瀬をはやみ…われても末に)

「代三郎」(傷だらけ)

「東海道」(五十三つぎ)

「悪太郎」(生傷が絶えない)

「愚息」(後つぎ)

「十文字」(接ぎ跡の形)

「駿馬」(よくかける)

「響の灘」(ひびき)

「砧」(音がひびく)などがあります。

世の中にはまだまだ面白い銘があると思います。ご存知の方はぜひご教示ください。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~